

少数民族における「時」の観念と「所有」観

——タイヤル族エヘンにおける事例研究——

大 川 正 彦

1. はじめに

台湾省桃園縣復興鄉三光村爺亨（エヘン）は、桃園國際飛行場から東へ約 80 Km の山中に在り、日本領有時代（1895 年～1945 年）はガオガン（合歡）蕃エヘン社と呼称されていた地域である。エヘンの人々は、タイヤル族の一氏族であるスコレク（Səqoleq）系統に属する人々である。

タイヤル族は、その伝説・言語・慣習の相違等を基準に、スコレク（Səqoleq）系統、ツォレ（Tsəole）系統、セデク（Sədeq）系統の 3 つに分類される。スコレク系統の人々は自己の伝説・神話によると「ピンスブガン」を発祥地とし、『人』を Səqoleq と称し⁽¹⁾たところからこの呼称がつけられた。

ガオガン蕃は「從來大嵙崁後山番ト称シ来リシカ現時ハ此名称ヲ用ヒス、番族固有ノ名称ニ從ヒガオガヲ番ト称シ「ガオガヲトハ『ガオン』（小溪）ナル語ヨリ来リ小溪ノ所ノ所在地」⁽²⁾という由来を有する地域である。（図 1）当時、大嵙崁溪支流の「ガオガヲ溪」の両岸に、19 社 374 戸、2187 人の山地人の居住⁽³⁾が記録されている。

本論に登場するエヘン社はその内の一社であるが、大正の初期に駐在していた日本人の警察官の指導によって開墾された棚田を南側斜面にもち、周囲を李嶼山、拉拉山に囲まれた戸数 45 戸、人口約 300 人（1990.8.現在）の一集落である。「陽のおそく当る所」を意味する「エヘン」社は、背面の水源地から灌漑用水路を南斜面の中央部に設定し、その両側に水田が作ら

れている。現在は、減反政策の影響でこの斜面では全く稲作は行われていないが、昭和 8 年度に全省でもトップクラスの良質米の産出と出荷を行い、「優良水田」として台湾総督府から表彰を受けたことは、今でも村人の語り草となっている。⁽⁴⁾

1945 年、太平洋戦争敗戦の結果、約 50 年間「思想善導」の中心となっていた日本人警察官が一斉に帰国したあとは、まるで心に「ぼっかりと穴があいた」ような淋しさを感じたと古老はいう。幼少の頃（7 才）から半ば強制的に「蕃童教育所」に通わされ、徹底した「皇民化」、「一視同仁」の名のもとに日本式改姓名を求められ、「日本人化」に何の疑いをもつ余裕さえ与えられず、「ニッポン精神」、「大和魂」を教え込まれてきた山地人は、日本の敗戦により絶対的と半ば信じてきたその価値感ほろくも瓦解してゆく。

戦後（光復後）の 10 年間ないしは 15 年間はゆっくりとした社会変化——物質的変化であった。戦後の教育は共通語としての中国語（北京語）による「三民主義」のそれであった。彼ら山地人はそれを「ジユウ主義」という。それまでの厳格な規律と統制を求めていた「テイコク主義」教育と比較すれば、戦後のそれは「方法ない」（仕方ない）「ジユウ」と映ったのではないだろうか。大きくゆらぐ価値感に更に追い打ちをかけるようにして導入されたのが、昭和 40 年代の「デントウ」（電気）であった。

電気の導入は、村の生活を一変させるに余るほどの影響をもたらした。それまでの生活は、夜明けと共に起床し、ある者は「水田の世話」をし、ある者は山林に入り木材の伐採を行い、

— 48 —(139)

夕方帰宅し、夕食後は8時頃には就寝というサイクルであった。電気の導入は、この生活サイクルを大幅に延長せしめ、若者にラジオの購入を迫る。当然のことながら若者たちは、共通語(普通語)である北京語で教育を受けてきた世代である。両親、祖父母とのコミュニケーションは、部族語であるタイヤル語で行われていた。そして若者は、2年間の兵役義務を終えて山地に戻ってくる時は、両腕からこぼれんばかりの平地の「文明の利器」を運んでくる。「故障ないのが上等」とかたくなに信じている年配者は、「すぐ故障」する文明の利器ばかりを求めている若者に眉をひそめる。そしてこの傾向は、昭和50年代に入ると更に強まってゆく。

エヘンは、桃園縣大溪を起点とする「北部横貫道路」のほぼ中間点に位置している。昭和50年代から、北部横貫道路の整備・拡張が頻繁に行われるようになった。その結果、エヘンは急速な「都市化」就中大型の文明の利器が流入する。例えば、ラジオに取って代わったのがテレビであり、エヘンの人々の足代わりとなったのが125ccの台湾製のオートバイであった。更に、プロパンガスの普及は電気冷蔵庫の普及とあいまって、食生活に大きな変容を迫ってきた。つまり、伝統的な食事・調理法から、調味料・油を多用した漢民族的食事へと変化を余儀なくされたのであった。

こうした物質的変化、特にテレビの普及は若者に誘惑的な都市文明をダイレクトにぶつけることとなり、多くの若者が「憧れの平地」へ惹きつけられるようにして下山してゆく現象を惹起するのであった。山地に止まり細々と労働にいそむのは、年老いた両親と小・中学生の子どもたちである。

昭和60年代になると、台湾経済が「四匹の竜」の仲間入りをするようになると、山地の様相も変化を見せはじめた。エヘン一帯は、梨、桃、椎茸、竹、松、樟楠等の山産物の供給地である。山地人に求められてきたものは「売れるもの」であった。つまり、消費者が好んで買ってくれる商品であった。特に果実類にその傾向

が強あらわれてきた。「味は上等」だが形の悪い物は選別ではぶかれ、形の良い物だけが、収穫されたその日の夕方には台北市、桃園市、板橋市等の青果市場を目指して出荷されてゆく。まさに山地経済は、台北経済圏の一翼としての機能をはたしているのである。こうした経済的機能は必然的に平地人との接触の機会を増加させ、山地に物質的变化をもたらす要因のひとつとなるであろう。

こうした歴史的、客観的事実を踏まえて、異文化と接触している「少数民族」の内側から「文化変容」をもう一度考えてみようとしてはじめたのが、高砂族の調査であった。またそこには、強弱の差こそあれ異民族、異文化の支配・影響を受けつづけてきた「少数民族」のひとつの姿をみることができるであろう。

今日まで数多くの「民族誌」が出版されているが、それは多くの人々の関心を文化人類学研究に惹きつける効果は絶大なるものがあつたであろうと思われる。しかし、それらの研究は、eticな視点を重視するあまり、換言するならば調査者の外側からの論理がもちこまれるあまり、例えば「未開民族」、「原住民」という言葉の持つ言質が、文化的にも知能的にも我々「文明人」よりも1ランク下という印象を与えてしまったのではないと思われる。フィールドワークを中心とする文化人類学の研究は、もう一度emicな視点からの調査研究が重視されてよいのではないと思われる。もちろん、文化人類学の研究は、eticな視点とemicな視点の相互作用の中から精緻な研究成果が生まれるであろう。更に、eticな研究はemicな研究によって支えられるであろうし、emicな研究はeticな研究から数多くの重要なヒントが与えられるであろう。

このような視座をもって、筆者は台湾北部の山中に居住するタイヤル族の一寒村をフィールドに設定し、emicな視点から調査をすすめてきた。その過程の中で、山地人と平地人が仕事上にしろ個人的交遊関係にしろ、その接触には何か一種の異和感に似たものが存在しているよ

うに思われた。それは、山地で生活している山人同志の接触では全く気付くことのなかった一種のピーンと張りつめた緊張感のようでもあった。好むと好まざるとにかかわらず、異文化の受容を余儀なくした側の民族であるタイヤル族の社会的行為をその民族の内側に視点を置いて観察したらどのような結果が表出してくるのであるかという問いかけは、常に筆者の持つ視点のひとつとして調査を行ってきた。この点では、筆者の調査には冒険的で初歩的な間違いや資料の評価、導き方等についての批判があるかと思われる。ともかく、永年エヘンの人々と接触を持ちつづけた筆者としては、「時」の観念と「所有」の観念をキーワードにして、一定の見通しをつけてみようというのが、本報告である。

2. 「時」の観念と「所有」観念

(1) 時の観念

我々が日常生活を送ってゆくうえ、先ず必須な条件として「時間」が求められてくる。「時間」は1日を基準として細分化され、1日を単位として1カ月、1年と拡大されてゆく。人間の日常生活は、このような知識を体系化した暦に従って営まれているといえよう。従って、「時」の観念は必然的に社会の影響を受けるであろうし、そこには社会差あるいは地域差の存在を認識しなければならないであろう。当然、ある社会にあっては暦で計りうるような1日、1カ月、1年といった観念は必ずしも存在するとは限らず、各民族、部族が独自に決めている主観的な「時」の存在があるであろう。人間の生活が、社会や集団の影響、規制を受ければ受けるほど、その民族、部族独自の行動様式が存在すると考えるならば、「時」の観念も民族独自の基準によって決定されていると考えられるのである。

我々は、外来の知識体系である太陽暦に従って生活を送っており、それを当り前の事として観念している。しかし、個々の民族・部族には伝統的な時間の観念があり、太陽暦の知識体系

は認めながらも、その伝統的な時間の観念に無意識に従っている部分もあるであろう。時の観念は「その村落の『場』において、天体その他の自然現象の中で体験される余り体系的でない、個性や社会性を示している」⁽⁵⁾のものであり「その社会の文化の本質と関連」⁽⁶⁾しているものと考えられる。更にまた、個々の民族の持つ「時」の観念や「所有」観念を明らかにすることは、「平等主義を背景とした弱者・マイノリティの論理として登場してきた」⁽⁷⁾エスニシティ (ethnicity) を考察する場合、極めて有効なヒントを与えてくれるであろう。なぜならば、「生きたエスニシティの理解は……それぞれの地域における歴史的背景の違いとの対応のなかで行われるべきもの」⁽⁸⁾であるからである。

なお本論で使用される「時」の観念は、次のような意味内容に従って使用したものである。

従来、時の実在に対して2通りの説が行われている。その第1点は、主に自然科学の分野で使用される物理的、生物学的あるいは実験科学としての心理学的時間のように、存在そのものの空間的な位置の変化としてとらえられる時間、つまり、一定不変の速度をもって定率的に流れる客観的実在としての時間。第2点は、主に哲学の分野で観念された主観的、経験的に認識された時間である。「光陰矢の如し」の光陰に該当するものである。それは意識の移り変わりであり、「継起」(succession)を有しているものである。⁽⁹⁾本論では後者の立場で「時」を使用するものとする。

さて、すでにみてきたように、エヘンを取りまく社会環境は急速な変化をみせ、部外者であってもその変化は容易に認識できるものである。もちろん、エヘンの人々自身もその変化を認識しているであろう。「今時の若い者は云々」とか、若者たちの行動を評して「媽媽虎虎」という言動の内に、認識の範囲の程度の差こそあれ、時の流れの認識をみることが可能であろう。この場合、時の流れをどのような基本単位をもって計ったのであろうか。

エバンス・プリチャード (Evans-Pritchard,

E. E.) によれば、ヌアー族の場合は1日の時間帯は「牛時計」であるという。(10)

一日を刻む時計は、牛時計であり、牧畜作業の一巡である。そして、ヌアー族にとっては、一日のうちの時刻と時間の経過を示すものは、おもにこれらの作業の連続であり、諸作業間の関係なのである。そのうちわかりやすいのは、牛舎から家畜囲いへ牛をつれ出す時間、成牛を牧草地へつれていく時間、山羊や羊の搾乳の時間、山羊、羊、仔牛を牧草地へつれてゆく時間、牛舎や家畜囲いの掃除の時間、山羊、羊、仔牛をキャンプにつれ戻す時間、成牛の戻す時間、夕方の搾乳、牛舎に家畜を入れる時間、等である。ヌアー族が出来事を対置させるとき、彼等が一般に用いるのは天空における具体的な太陽の位置ではなく、こうした諸活動の区切りとなる時点である。だから、ヌアー族は、「乳しぼりの時間に帰ってくるだろう」とか、「仔牛たちが戻ってくる頃、出発するつもりだ」という表現をする。

もちろん生態学的な時間の計算は、究極的には天体の運行によって完全に決定されるものであるが、時間の単位やあらわし方が天体の運行に直接依存しているのは、たとえば1カ月、昼、夜、あるいは昼と夜のある部分といった限られたわずかなもので、しかもそれらが照合点として注目され、採択されているのは、社会活動にとってそれらが意味を持っているからである。……その単位やあらわし方のほとんどすべてを提供しているのは諸活動そのもの、それもおもに経済的な諸活動である。

いささか引用が長くなったが、ここで注目していただきたいのは、ヌアー族の場合、1日、1年、季節といった時の経過は、人間の経済的な諸活動の連続体として捉えていることである。つまり、1日とか1年あるいは季節の変化は、気候の変化に基づいたものではなく、人間の社会的な諸活動を基盤として分けられているのである。

ヌアー族の場合、ひとつの典型的な例と思われるが、台湾の原住民族である高砂族の場合も、時の観念は気候の変化に基づくものではなく、人間の諸活動・諸作業によって識別されているという。

台湾省花蓮縣光復郷の東、西、南、北富田村は、かつてタバロン社と呼称されていたアミ族の一集落である。この集落では、毎年夏に行われる「年の折り目の祭」を意味する「イリシン」の行事であるサパトロナンによって、村の周囲にある森林原野の焼畑耕作が行われる。この耕作地は1年の折り目であるイリシンをもって順次移動し、タバロン社の人々はこの農耕地の地名をもって自分の年の表現を行うという。この農耕地は10年程で一巡したから、世代差の認識にも役立ったのである。(11)

同じ高砂族の時の観念の調査に移川のそれがある。移川(12)はタイヤル族の時、季節の認識を次のように述べている。

高砂族北蕃アタヤルは、1年を夏冬の2季に分って、夏をabanganと言ひ、木の葉(abao)の繁茂(bangan)する季節の意味である。冬はKamisanなる言葉を以て言表されてゐるが、この語義に就いては明瞭ではない。……然し想ふにこれはKamamis-an(冷たい風の吹来る北方)の意味から出た語と考えられる。

更に移川の調査によると、タイヤル族においては、1年を夏と冬の2季の認識にもとずき、更にそれをいくつかの時候に識別する。

I. Abangan (夏)

4月頃

taganas (ハンノハエゴの木)の花やwax-tsimo (ミフカラギ)と云ふ蔦蔓の花時で、この季節にのみに聞かれる鳩大の一種の鳥が鳴く。これが所謂陸稻播種季節であって、闇夜又は弦月の時を選んで播種する。

5月頃

Saadji (筍雨)即ち「筍の雨」の降る時で、梅雨季節である。

6, 7月頃

Taibon の季節と云ふ。一番暑い土用頃で、炎暑の為に草木の葉は色を喪ひ穀類の葉は実り熟して「黄色になる」(mahebon) ところから出た季節の名前で、大小2季に分たれ、6月頃を Tailon Tsikui (小)、7月頃を Tailon yaba と云ふ。粟や芋の収穫季節である。

8, 9月頃

Tauben と称し、風吹き「雲下る」意味であって、時雨、暴風雨なぞの多い季節である。

II. Kamisan (冬)

自10月頃至3月頃

10月頃から3月頃までの約6ヶ月が Kamisan と言って冬季であるが、粟畑の開墾、播種、伐採等があり、農繁期である。併し特別の名称が無く、唯だ2月頃を Surapao と言ひ白い山桜(surapao)の咲く季節である。

移川のこの報告の意図するところは、タイヤル族においても、季節認識は農耕活動に基づいているということであろう。しかし、筆者がフィールドとしているエヘンでは、移川の報告より若干異なる内容をもっている。

エヘンでは、1年をカワス(kawas. 年、年齢、年輪)といい、やはり農耕作業をひとつの大きな基準として、夏(bagang)と冬(qamisan)の2季に識別していることは、移川と同様であるが、エヘンを含む桃園縣復興郷ではこれをもう少し細分化し、次のような識別を行っているのが特徴である。

I. alin bagang (春。「早い夏」)

1, 2月頃

赤い花(hana mtalah)の咲く頃。赤い桜(qujimux)の咲く頃。この時期に稲、粟を植ると「上等とれる」という。

3, 4月頃

白い花(hana pəlqwiw)の咲く頃。白い桜(qujimux)の咲く頃。稲、粟の播種を行う。

5月頃から7月頃

白い花(ユリ, qeino na utox)の咲く頃。「お盆祭」、収穫祭を行う。

II. bagang (夏。「暑くなる」)

粟、イモ、南京マメ、麻を植える。木の葉がボツボツ出てくると夏。新芽の出るのが夏のはじめ。

III. alin qamisan (秋。「早い冬」)

木の枝、葉が落ちる頃。モミジ(laga)がおりた時。エンドウ豆を植える。山狩りに行く頃。太陽暦で表現するならばおよそ10月~11月頃であろう。陸稲の収穫期。

IV. qamisan (冬。「寒くなる」)

この時期は全く「仕事ない」時期であり(農閑期)、春の田植の準備期間であろうと思われる。

復興郷では、前山と奥山では気温の関係で若干の時期的なズレは存在すると思われるが、いずれにしてもこの地方では、農耕作業をひとつの目安として季節認識を2つにとり、更にそれに若干の気候的変化の要素をも加味し細分化を行っているように思われる。つまりある若手の informant は、主に気候の変化に季節認識の中心をおくニュアンスであった。それに対して高齢者の informant は、気候、自然現象の変化を目印(pinskiyaya)として田植えや播種を行うというニュアンスであった。移川の調査に従えば、季節認識は農耕活動に基づくことになるのだが、ではエヘンの事例でみられる微妙なニュアンスの相違は何んであろうか。

1954年に公表された林衡立のタイヤル族の「歳時禮俗」の報告書⁽¹³⁾も、移川と同様、農耕活動に基づいて季節の識別を行っている。

「通信」および「実地」調査を行ってきた林衡立によれば、桃園縣復興郷のタイヤル族は、梅の開化あるいは山桜が蕾をもちはじめた頃に粟播を、梅檀あるいは栗の開化をもって早稲を植するという。前者は播種後5~6カ月、後者は7~8カ月後に収穫をみる。タイヤル族は、1カ月(coto yachin)は認識しているが、1年

は何か月かは知らず、1回の収穫（おそらく晩稲であろうと思われる。筆者注）をもって1年としていたという。

つまり、多くの報告書がそうであるように、移川、林の報告書もタイヤル族を稲作民族と前提して論旨をすすめ、本来彼らタイヤル族が保持していると思われる狩猟・採集民族の性格に多くの注意を払っていないように思われる。タイヤル族の稲作は比較的新しいでき事であり（エヘン社の場合は大正12年頃から水田耕作が開始された。）彼らの日常生活を観察すると、狩猟に最大の喜びを感じている人々と考えられる。かつて、焼畑耕作のかたわら狩猟に最大の努力を払っていたのがタイヤル族であった。

かつてのタイヤル族は、その生活資源の大半を焼畑耕作に求めていたであろう。焼畑は陸稲である。陸稲は、3年ないし5年の周期で耕地を変更しなければ収穫は半減し、狩猟、採集による生活資源の確保に比べると、自然現象の影響は強く受けるが、しかしはるかに収益の多い、そして確実に定量の食糧を得ることの出来る資源である。しかし、焼畑耕作は3年ないし5年の周期で耕地を変えなければならないので、ここにタイヤル族のもつ高い移動性が必然的に表出してくる。あるいは、移動性に関していえば、焼畑耕作の技術が伝播する以前は、狩猟・採集で生活資源を獲得していた民族であったのではないかとと思われる。それが人口の増加、気候変化等々による獲物の減少、獵場（qēqēlupan）の縮小化を惹き起こし、安定した生活資源を確保する必要性から焼畑耕作へと移行したと考えられる。ここに、焼畑耕作を主な生業とし、狩猟・採集を副次的生業とするタイヤル族の基本的社会の姿を見ることが可能と思われる。

焼畑に基礎をおく「山村に鉄砲を多く保持する者」が多いことも、「subsistence economyは、焼畑耕作を基礎に、狩猟、採集、漁撈というきわめて広いspectrumをも」ち「生業は複数からなり、季節にしたがって推移」⁽¹⁴⁾するタイヤル族、換言するならば高い移動性を保有しているのがタイヤル族といえるのではないかと

考えられる。

従って「時」の認識も、高い移動性を保持しているがゆえに、移川の報告よりは更に具体的であり、気候的・自然的現象をより五感的にとらえ、気候の変化に形容詞的表現を加味するに至ったのではないかと推察できるであろう。つまり、焼畑耕作に生活資源の基盤を置いてはいるが、本来的に行ってきたであろうと思われる狩猟・採集民的性格を今日まで色濃く残し、季節認識の微妙なニュアンスの相違はその痕跡であろう。

さて、エヘンの人々にとって季節以外の時間の認識をみてみよう。エヘンのタイヤル族は1日の時間帯を次のように認識している。

moqwas nuta（一番鶏）の鳴く頃……午前3時頃

sajing moqwas nuta（二番鶏）

tsygal moqwas nuta（三番鶏）

pəyats moqwas nuta（四番鶏）

実際には「使っていない」⁽¹⁵⁾

sasan……午前6時頃。朝。朝食（manyamami sasan）の前。早朝。

suka wagi……真ん中の太陽。正午。

qlyan……昼食をとる時間。昼。

zubiyan……夕方。太陽が沈みはじめた頃。午後6時から7時頃。

suka begi……真ん中の夜。深夜。

エヘンの人々は、日の出と共に起床し、日没と共に就寝という極めて大雑把な一日（コット・リャフ coto ryax。ひとつ・日中）の捉え方である。日の出、日没は地域によって相違するものであり、同じタイヤル族でも coto ryax の捉え方に違いが生じるのは当然である。しかし、大雑把な時間帯といえども太陽の規則的な運行を基準としていることは、ヌァ族の例でもみられるように他民族に共通してみうけられる現象であろう。

こうした伝統的な時間帯に大きな影響を与えたのが、日本領有時代の「蕃童教育所」での近代的教育であった。そこでは、日常生活を送るうえで最低限必要な知識を日本語で教え、外来

語は現地語に翻訳せずそのまま使用させていた。例えば、時計を *spung wagi*, *spung ryax* (計る・太陽, 計る・日) と表現している書籍⁽¹⁶⁾ ももうけられるが、時計は *tokei* で充分通用する単語である。又、時間を尋ねる場合、*bila spung-a* (今・計ると) でも通じるが、*bila nanji* の方がより一般的であろう。つまり、ここで強調しておきたいのは、エヘンを中心とするタイヤル族の人々にとって1日の時間の観念は、それが1日は24時間あり、1時間は60分という規則性をもって1日を定刻に細分化された思考を持つようになったのは、日本領有時代の教育からである。定刻がくれば教科書(「蕃人読本」)、ノートをカバンにつめ、草履をはき、定刻に登校する。学校での生活は時間割に従って午前中は国語、算数、修身(歴史を含む)等の座学を、午後は「天産物」の利用、加工、飼育等の実習という、すべて「時間」に従っての生活であった。加えて、1学年は、365個の *coto ryax* の積み重ねで構成され、その中には祝祭日、学芸会、修学旅行、遠足、運動会といった「楽しみ」が設定され、それらの学校行事もすべて「時間」によって運営されているということを学習したのであった。「蕃童」にとっては、一步家を出れば、すべて「時間」によって社会生活が規制されているということを、「教育所」で学習した。従って、今日のエヘンの人々にとっては、伝統的な時間帯の観念と、近代的な時間の観念の2つの世界に住むことになるのである。

なお、年齢の教え方にはいくつかの方法があるようである。1つは焼畑耕作地(*qəmayax*)を目安にする場合である。例えば、焼畑耕作(陸稲)は年1回の収穫であるから、A地点で出生した子どもは、そこで何回の収穫があったのか。A地点を廃耕地(*naqome kawas*)とし次の *qəmayax* へ移動。そこで何回の収穫を行ったのか。これらを合計して年齢を割り出す方法である。2つ目は、その時の社会的、気候的、自然的現象を目安にして、それから何回の収穫があったか、あるいは「頭のいい人」

(*bilaq tunux*) はヒモに結び目をつくって記憶する方法である。例えば「日本人がはじめて来た時」、「非常に寒かった(暑かった)収穫」「山桜のおそく咲いた時」、「大型獣(月の輪鹿、鹿、猪など)がたくさんとれた時」、「祖父(*yutas*) が亡くなった時」等を目安にして、それからおよそ何回の収穫あるいは結び目が何個かによって割り出す方法である。

また、月をみて満月から満月までを1カ月と認識していたので、その認識をもってすると、陸稲は播種から収穫までおよそ *məpu yachin* (10個・月) つまり10カ月かかるので、エヘンの人々にとっては、1年は10カ月ということになるであろう。

(2) 所有の観念

エヘンの人々の有形、無形の「物」(財)に対する「所有」観を明らかにすることは、彼らの人間関係、ひいては社会観、社会組織を知る上で有効な方法と思われる。

調査の方法は、ひとりの被調査者を定め、今、彼あるいは彼の家族が所有しているすべての物について彼本人と中学2年(男子)の子どもに同じことを聞いた。被調査者である高進祥(40才、山地名はベファイ・マライ)は、エヘンで生まれ育ち、現在もエヘンを生活の本拠地とし、エヘンの人たちからは比較的人望を集めている、さしずめ青年会議所会長というところであろう。家族構成は4男1女で彼の母親が同居している。登記上の職業は農業であるが、現実には全く農業は行っておらず、日本製の4.7トントラックを1台所有し、山産物の運搬を中心に生計をたてている。

調査項目は、日常生活で目につくあらゆる有形、無形の物が、誰れに所有権、占有権、優先使用権・処分権が存在するのかを調べ、それによってエヘンの人々の人間関係あるいは文化の特質を財産の側面から捉えてみようを試みたものであった。問題点を明らかにするため、調査結果を一覧表にしてみよう。

図2 財の帰属

項目	帰属	家	夫	妻	個人	村
不動産						
河 (lyun)						□
河辺 (siyao lyun)						□
可耕地 (qamayax)						□
水源 (hoken-sha)						□
山林 (rungax kanahei)			×			
水田 (səlaq)			×	×		
墓地 (boqon)		×	×			
集会場 (シューカイジョ)						□
道路 (tuqei)						□
休耕地 (kanahei)		○				
更地 (unux hayan)		○		×		
庭 (tanux)		○		×		
宅地 (unux hayan)			△	×		
家屋 (ngasal)			△	×		
番小屋 (tatak)			×			
穀倉 (kaho)			×			
乾燥室 (puyan pagai)			×			
厨房 (nobui)				×		
御手洗 (sunukun, ベンジョ)				×		
鉛ビ水管 (takan-sha)			×			
漁具						
釣竿 (boyau)					△	
釣糸 (ngasin, テングス)					△	
重り (balyaq)					△	
カンテラ (カンテラ)					△	
魚籠 (waya qole)					△	
魚網 (アミ)					△	
投網 (sukaru)					△	
魚槍 (bu-qole)					△	
狩猟用具						
弓 (lakei)					△	
鉄砲 (patus gomu)					△	
矢 (torogan)					△	
蕃刀 (lalao)					◎	
農具						
クワ (kala)		○				
カマ (soki)		○				
スキ (qebu)		○				
耕運機 (qebu kikai)		○				
スコップ (スコップ)		○				
ザル (luqu)		○				
臼 (rohon)		○				
キネ (qsuju)		○				
運搬用具						
背カゴ (kili)						○
牛車 (リヤカー)						○
鉄牛車 (テーニュー, popok)						○
自転車 (ジレンシャ)						○
オートバイ (オートバイ)						○
トラック (ジープ)						×
背袋 (yubin qosai)						○
ショルダーバッグ (pushi)						○
日常雑貨						
鋸 (harahei)						○
オノ (putus)						○
蒸器 (skulawan)						×
ひしゃく (taku)						×
水筒 (スイトウ)						×
おわん (piyatu)						×
食卓 (ハンダイ)						×
ナベ (ナベ)						×
はし (qwai)						×
皿 (サラ)						×
包丁 (ホーチョウ)						×
深ナベ (kyawan)						×
衣類 上着 (ruqus)						○
ズボン (yopun)						○
下着 (女性用. シタギ)						○
帽子 (qubu qoyan)						○
カップ (カップ)						○
棕雨衣 (ruqwa)						○
鹿皮 (hanukui)						○
クツ (クチュ, yamin)						○
スリッパ (リッパ)						○
スカート (カトウ, skato)						○
歯ブラシ (qowa mux)						○
手拭い (pima)						○
コップ (コップ)						○
ベット (sakao)						○
ふとん (hemilau)						○
まくら (tunu han)						○
洋服ダンス (タンス)						○
椅子 (taikan)						○
装飾品						
ネックレス (tuyax)						◎
ブレスレット (luun)						◎
指輪 (kumui)						◎
イヤリング (mishai papaq)						◎
腕時計 (トケイ)						◎

家畜					
牛 (kachin)	○				
豚 (bijoq)	○				
猪 (bijoq nahen)	○				
ニワトリ (nuta)	○				
ガチョウ (ガチョウ)	○				
アヒル (qulu)	○				
犬 (hojin)	○				
電化製品					
テープレコーダー (チクオンキ)					○
ミシン (ミシン)			○		
織機 (tuminun)			○		
糸巻機 (tumurun wayai)			○		
ラジオ (ラジオウ)	○		○		
テレビ (電視)	○				
冷蔵庫 (冰箱)			×		
電話 (デンワ)	○				
自家用車 (ハイヤー)		×			

- ……主たる帰属 △……優先的使用権
 ×……日常の管理 □……村の所有, 管理
 ◎……占有権
 () 内の片仮名は日本語の転用

伝統的技術・技能

父から男児へ継承されてゆくもの

1) 狩猟技能

狩猟準備: 衣類, ゴム長, 半合, 米, 水, 酒 (米酒), 塩, 懐中電灯, ヘッドライト, バッテリー, 蕃刀, 背負籠, 鉄砲 (patus gomu), 矢など。

狩猟方法: 動物の検索・識別, 鉄砲の使用・取扱い, 獲物の処理方法, 猟地の認識。

狩猟儀礼: 出猟, 帰猟時の儀礼, その他。

2) 金属加工

蕃刀, 鋸, 簞 (ヤス), 鉄砲の保守, 矢の作製。

3) 伐採技術

木材の識別, 伐採方法, 運搬方法, 「土場」の機械操作方法, ロープがけ。

4) その他

山の気候・雨後の山・道の状況の「読み方」。対山地人・対平地人 (mukan) との人間関係, 仕事上のノウハウ。

家督権, 財産の継承

1) 不動産: 「兄弟で平等に分配」

2) 家屋: 老親を扶養する末子 (男子) が継承

3) 家督権: 一族の長兄が代表格となって対外的, 対内的にも多くの発言をする。家督権そのものの存在は認めがたいが, 一族の会合 (coto neqan, 共食団体) では長兄が絶対的な発言権を有しており, いわば代表権に相当するものである。

家庭内での男女の地位, 躰

1) 夫の役割

戸主であり, 対外的にも一家を代表。経済活動の主体者。男児への躰——年長者, 客人に対するマナー, 対人・対友人関係への助言, 父・祖父への手伝い, 家事の手伝いなど。

2) 妻の役割

家庭内労働——炊事, 洗濯, 掃除。子どもの養育, 義父母の扶養, 畑の除草 (satori), 椎茸の乾燥, 乾燥庫の手入れ, 家畜 (鶏, ガチョウ)・犬の世話, 学校への連絡, 他家への手伝い (アルバイトも含む)・連絡, 子ども特に女児への躰

エヘンでみる限り, タイヤル族の家族型態は, 現住状況から捉えると, 「直系家族」⁽¹⁷⁾が多くみうけられた。家族構成, 形態, 家族関係等については, 稿を更めて述べることにして, ここでは被調査者の家族では祖父から父へ, 父から子へ, 子から孫へと綿々として語り継がれている「家の精神」⁽¹⁸⁾, 換言するならば民族の心といったものが存在しているということだけを述べておきたい。

さて, 論を進めるに当たって財産, 所有権を

次のような意味内容を有する概念としておきたい。人は家庭を営み、社会的生活を営んでゆくうえで、必然的・結果的に有形、無形あるいはプラスの価値、マイナスの価値をもつ財を手に入れるであろう。このような財は、他者あるいは他集団に対し、有形であれ、無形であれ、優先的に利用あるいは所有できるものである。これを財産とする。財産には所有権が付随する。所有権とは、ある特定の物・財産を「排他的に支配し、使用・収益および処分」の機会を有する権利⁽¹⁹⁾と仮説的に理解しておきたい。このような近代法的な解釈、視点からタイヤル族の財産・所有観をみると、そこには異和感を感じないわけにはいかないであろう。つまり、図表2からも明らかなようにタイヤル族には、権利、義務、所有権といった近代法的観念は存在しないのである。しいて「所有」に関する単語を挙げるならば、「財産」がある。財産を表現するタイヤル語には、次のようなものがある。

1) batejox

槍という意味をもつこの単語には、個人的な強い優先的権利をもつというよりも、むしろ集団のもつ管理義務的なニュアンスであろうと思われる。

2) eyam-munayaq

自分の植えたもの、栽培したものに対し、他者が勝手に使用したり、取ることでないものという意味で使用されるものである。一族 (qoto galo) あるいは一家 (coto ngasal) の集団的所有というニュアンスである。

3) ugats saqoleq kumun

「ない・人・取る」つまり他人が取ることでないもの。

なお上記1) に関し「国語びき北蕃語辞典」は次のような解説を加えている。⁽²⁰⁾

「本族ノ財産観念ハ子女、銃鎗、珠裙、鍋釜、蕃布、豚、鹿皮、鹿角等ニシテ土地、家屋、穀物ヲ含マズ」

この解説を日本語世代の年配者 (65才) に見せ、その反応をみるとややしばらく考え込ん

でいて一言。「以前はそう (であった)。今は違う」であった。上記に列挙されたものは、かつては贖物として利用されたもの (銃鎗、珠裙、蕃布、豚) であり、結納品として利用されたもの (珠裙、鍋釜、蕃布、豚) であり、自己の武勇の象徴 (鹿皮、鹿角) であり、巫師への謝礼 (珠裙) であり、離婚時、妻方の両親への贈物 (珠裙) という性格を有するものである。また、男子以上に女子が多ければ多い程、結納品としての珠裙がその実家に納められるであろう。特に女子の場合、珠裙は他家へ嫁ぐ娘の身価としての性格を強くもつものである。珠裙は「支那人の名付けたる名詞にして蕃人は之をビムトアンと云」い「布に白珠の縫着けたるもの」で「蕃人間に於ける唯一の法貨」(森丑之助「台湾蕃族志第1巻」p. 160) として通用し重宝がられていたのである。しかしこれらの物品を多く保有した者が、すなわちその社会的、経済的地位を象徴するものではないであろうし、権力者、指導者 (malax) を意味するものではない。タイヤル族の人々は、後述する coto gaga の強い規制をうけた生活を余儀なくされていたので、「天産物」特に獲物の肉は coto gaga で平等に分配するものであり、そこには富の蓄積という発想は極めて起りにくい状況にあったと推察できる。それはタイヤル語でいわゆる財産家を「カネモチサン」と表現することからも推察可能と考えられる。また、土地や家屋、穀物も財産と考えなかったのも、同じような状況によるであろうと思われる。従って、タイヤル族には、ある特定の物を排他的に支配し、それを優先的にもつという所有観念は言語的にも法的にも存在しないように思われる。次の単語 chux の用例をみていただきたい。

chux yaba su ga

お父さんはおられるか

chux yuwao

用事がある

chux pila nya ga

お金を持っている

chux maki inu pi

君はどこに居るか

「在る，居る，持つ」という時に，日常的，常套的に使用される chux には，物を排他的に支配し，優先的使用権というニュアンスはないのである。ただ，前述の一覧表中の「装飾品」に関しては，被調査者は「妻のもの」とはっきり強い占有権を主張した。

タイヤル族は妻の私産として「被服、装飾品ノ如キ附身ノ物件其他小額ノ動産」「機具ノ如キ物」「婚姻後実家又ハ夫家ノ親属ヨリ贈與セラレタル物件」「養畜機織」⁽²¹⁾を公認し、それは離婚後も「其私産ヲ持去ルコトヲ得」⁽²²⁾たのである。このような例は、中国・雲南省のミャオ族においてもみられるという。⁽²³⁾

タイヤル族は、上記の妻の私産を除いた部分の家産が、一家（家族）のいわゆる共有財産であり、それを日常的に妻が管理するという構図ができてくる。猟具や漁具に関しては、男子ないしはそれらを作製した個人にその優先的使用権

あるいは管理権が認められるが、これらはどちらかといえばという程度の問題である。

日常生活においても、一家7人で1～2枚の手拭いを使い、弟が兄の肌着や上衣、ズボンを自由に使ったり、訪ねてきた女性が被調査者の夫人の化粧品を使用したり、筆者が事前に送った数回の小包が開封され中の物が自由に使われたり（もちろんこの場合、子どもの行為であったのだが、後日両親は「reigi（礼儀, gaga）」がないとその非礼を詫びた）する光景を垣間見ると、強い私有観念の成立は認められない。従って、妻の私産以外の家産に対しては、占有権や優先的使用権、管理権は、あくまでも程度の問題であり、あえていうならばという程度である。

なお、不動産に関しては、すでに法的登記を完了しているので、一家の代表である戸主がその法的所有者となっている。山林、畑に関しては、一応戸主の承諾を得て主に親戚がそれを一

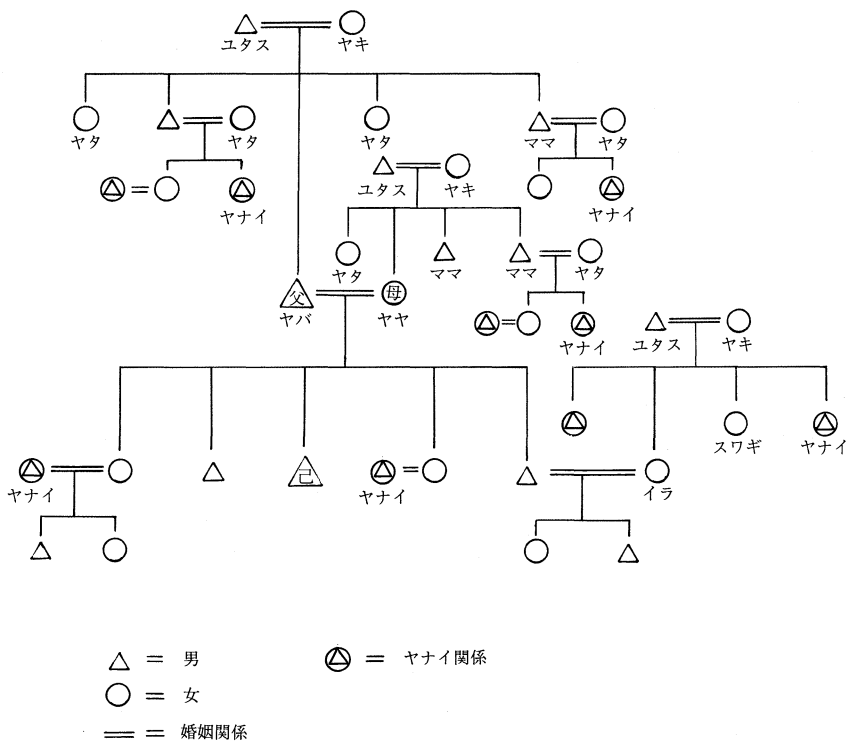


図3 タイヤル族の親族名称とヤナイ関係

時的、短期的に使用するケースが散見された。

タイヤル族のこのようなおおらかな「所有」観念の成立理由を、タイヤル族特有の親族組織であるヤナイ関係（yanai）に求めることができるであろう。（図3）

タイヤル族は、自己の妻方の兄弟、自己の姉妹の夫、父母の兄弟の子ども（従兄弟）をヤナイ（yanai）と称し、極めて強い連帯意識をもって結束している。それは、時には強力な協労体制をとり、時には相互扶助の機能を持ち、時には獵団（coto littan）を組み、時には戦時

同盟（coto bahaban）の契機ともなったであろうし、あるいは時には出草（馘首、magaga）の協力者となったであろう。かつての「蕃社」は平均しても30戸、約150名の人口であったと思われる。（図4）

こうした状況を考えると、他「蕃社」（集落）の人間との「endan」（縁談、見合結婚、あるいは親、縁者の紹介による結婚）が成立した場合、その縁を縁として持続し、相互の協力関係を保持する必要があったであろう。

自然現象に大きく左右される厳しい山地の生

図4 タイヤル族およびエヘン社の人口推移

年度		明治 45 年	大正 2 年	4 年	7 年	9 年	10 年	11 年	12 年	13 年	14 年
タイヤル族	男	13, 643	14, 349	15, 634	15, 538	15, 212	15, 212	15, 293	15, 171	15, 419	15, 628
	女	14, 228	15, 122	16, 534	16, 476	15, 939	15, 939	16, 058	15, 930	16, 181	16, 292
	計	27, 871	29, 471	32, 168	32, 014	31, 151	31, 151	31, 351	31, 101	31, 600	31, 924
エヘン社	戸数	25	24	30	27	34	34	35	21	22	34
	男	70	70	80	80	97	97	92	52	57	90
	女	83	85	94	87	90	90	87	56	56	93
	計	153	155	174	167	187	187	179	108	113	183
年度		大正 15 年	昭和 2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	7 年	8 年	9 年	
タイヤル族	男	15, 945	16, 094	16, 145	16, 391	16, 577	16, 231	16, 398	16, 771	16, 944	
	女	16, 583	16, 667	16, 761	16, 905	17, 133	16, 694	16, 904	17, 234	17, 389	
	計	32, 528	32, 761	32, 906	33, 296	33, 710	32, 925	33, 302	34, 005	34, 333	
エヘン社	戸数	36	37	37	38	38	38	38	38	38	
	男	74	76	75	78	77	76	75	78	83	
	女	89	84	89	85	87	91	97	99	101	
	計	163	160	164	163	164	167	172	177	184	
年度		昭和 10 年	11 年	12 年	13 年	14 年	15 年	16 年	17 年	18 年	
タイヤル族	男	17, 299	17, 623	17, 901	18, 185	18, 399	18, 676	18, 776	19, 090	19, 394	
	女	17, 658	18, 016	18, 227	18, 475	18, 685	18, 972	19, 029	19, 337	19, 671	
	計	34, 957	35, 639	36, 128	36, 660	37, 084	37, 648	37, 805	38, 427	39, 065	
エヘン社	戸数	38	37	39	39	40	41	44	45	44	
	男	89	86	86	85	90	96	97	95	98	
	女	105	98	100	108	111	117	126	128	132	
	計	194	184	186	193	201	213	223	223	230	

年度		民国 69 (1980 年)			民国 80 (1991 年)	
タイ ヤル 族	男	35, 145				
	女	30, 155				
	計	65, 300 ¹⁾			計	77, 359 ⁴⁾
三光村	戸数	109	{	爺亨 (エヘン)	45戸	298名
	男	385		復華 (テーリック)	21戸	110名
	女	357		三光 (プトノカン)	41戸	229名
	計	742 ²⁾		砂崙子 (サルツ)	27戸	159名 ³⁾
				エヘン	戸数	28
					男	60
					女	63
					計	123 ⁵⁾

注) 1) 「台湾省民政統計」No. 9, p. 112 台湾省政府民政庁編, 民国 69 年 4 月

2) 復興郷戸政事務所に登録されている公的な数字。なお, 光復以後の統計は, 集計方法, 単位, 山地居住, 平地居住, 住居表示, 行政区域等の数回の変更があったため, 戦前のそれと比較がむづかしいため割愛した。1980 年, 91 年の数字は実地踏査で得たものなので, 参考に供したい。戦前の統計は「蕃社戸口」による。

3) 1980 年, 未登記分も含めた常住人口と戸数。

4) 「連合報」(民国 78 年 10 月 23 日号) による。なお, 王人英によると民国 79 年のタイヤル族の総人口は, 平均人口増加率で推計すると, 86,822 人, 民国 89 年 (2000 年) には 99,146 人になるという。「台湾高山族的人口変遷」(中央研究院民族学研究所專刊 11. 民国 56 年) p. 168

5) エヘンを日常生活の拠点として, 実際に住んでいる人のみを対象。

活は, 人口の漸次増加に伴う生活資源の確保のむづかしさ, 獲物の減少, 獐場 (qēqēlupan) の拡張, 一族の相互扶助という機能を必要としたであろう。あるいは時によっては, 他「蕃社」との抗争時の戦闘員の補填, 抗争の未然防止, 労働力の相互補充をも必要としたであろう。このような社会的背景をもつ男性同志の強い絆——それがまさに yanai 関係であった。

こうした yanai 関係は, 相互に訪問しあい互いに飲食のもてなしをする。それは恰も自宅にいるかのように振まい, 取って置きの粟酒を提供し, タマミャン (tamamyan, 魚, 獣肉, 小動物等の麴漬け) を御馳走する。そして時には仕事の打ち合せをしたり, 時には獲物の自慢話をしたり, 時には山狩りの話をしたり, 時には家庭内のことを相談したり, 時には祭礼の手順について話しあったり, 子どもの「endan」(縁談) の相談をしたりする。このような席には女性が参加するということはないので, 互いに「jodan」(冗談話) を交すこともあろう。そして彼らが帰宅する時には, 何にがしかの手

土産を渡すのである。

このような行為は, 彼らにコミュニケーションの場を提供するものであり, それは精神的, 物質的連帯を強化する機能を果たす。ここに相互に助けあい, 時によっては互いに不足する物を援助・共用しようという精神を涵養してきたと考えられる。こうした一連の行為は, 部外者である第 3 者からみれば, タイヤル族の人や物に対する思考は, 実にルーズで, 公私の別なく, 自他の区別もつかないように映ってしまうのではないかと思われる。来訪してくる人はすべて「rawin」(兄弟。他者への親しい呼びかけ) であり, それはすなわち家族の一員であるという親和感をもって迎え入れられ, 物質的な供応をもいとわないのである。

山地での厳しい生活を営むには, その人的, 社会的, 経済的諸活動を平和的, 長期的, 持続的に継続してゆく必要が求められ, その必要性から創出されたのが yanai 関係であったであろう。それは小は家族 (hei na ngasal, 身体・の・家) から, 大は親戚 (həpiyung, 客,

縁家、親族)までもを包含する組織を円滑に維持、運営してゆく機能の一端を担っていたと想像できる。またさかんな「蕃社」間の交流や人的、経済的諸活動は、この yanai 関係があってはじめて成立し、一時期人口の減少は認められるものの、「蕃社」の維持、発展に大きくあずかっていたであろう。

このようにして、山地の社会的状況を推察すると、近代法的な財産観念や、彼らが保持しているいわゆる有形財に対して明確な所有権や権利・義務関係の成立を認めるものではなかったであろうし、またそれらが成立しにくい社会的状況にあったといえよう。

3. 結語

いかなる社会においても、そこで人間が社会生活を営む上で、暦の知識を利用し、時間的継起を明らかにして、それらを社会生活上の基本となしている。その意味では、暦の知識体系や時間的継起は、人間の社会生活をある一定の基準内に維持し継続する機能を有しているといえるであろう。

人間がある地域社会を生活の拠点として社会生活を営む以上、そこには社会集団としての独自の思考や文化的伝統、歴史的背景等が存在し、人々の行動を見えざる絆によって規制している。この見えざる社会的絆を見るためには、社会的行動を基準化している今日的常識である暦の知識や所有観念から離れ、人々の日常的行為の中に綿々と続いているであろう伝統的な「時間」の観念や「所有」観念に注目してみる必要を強く感じる。なぜならば、いかなる社会や民族においても、地域差や社会差こそあれ、「時間」に対する観念や物の「所有」に対する観念は存在していることは明白であり、それは更に生活文化と深い関連性を有しているからである。本論に登場してくるタイヤル族においても、それは自明のことであった。

一日を coto ryax といい、明るくなれば活動が始まり、日没とともにそれが終了という時間帯は、朝 (sasan), 昼 (suka wagi), 夕方

(zubiyān) という大雑把な捉え方であり、タイム・スケジュールのない作業は、その当日中に終了しなければ、当然、翌日 (kin-suxəm qasa) にくり入れられるという感覚であった。このような、coto ryax に対し、季節認識はやや繊細な感覚でとらえる。気温の変化——「暑い」、「寒い」を夏・冬と捉え、更に特定の花の開化、小枝、葉 (laga, モミジ) の落ち具合で、それぞれ春・秋と認識した。

自然現象を五感的に捉えるタイヤル族の鋭敏な感覚は、本来狩猟、採集技能をもって生活資源を得る手段としていた民族を彷彿させるものがある。それは、程度の差こそあれ彼らが保有している狩猟用具や漁労用具に、他の保有品にくらべ優先的権利あるいは管理権が認められている事例からしても、狩猟、採集民の性格を読み取ることが可能である。

また、その性情は極めて男性的であり、勇猛果敢であり、時には荒々しく、時には人跡未踏の山林を「猿のように」駆け巡る。その反面、何事に対しても旺盛な好奇心をもち、部外者に対しては一面はにかみをみせる。食生活においても、料理した獲物の頭部は必ず年長者あるいは客人に提供する。首狩り (出草。馘首。mägaga) と同様、獲物の頭部にはその動物の全霊が宿っていると発想する。頭部を食べることは、その全霊を我がものにできるという。山で生活する人間の純粋な思考と思われる。このような思考、行動は、狩猟、採集民の性格の表出であり、それゆえ自然現象に敏感であり、季節認識に時候的感覚の要素が取り入れられたと考えられる。

さて、既述したとおりタイヤル族には「所有」観が成立しにくい事情を述べたが、ここではタイヤル族の制度的「蕃社」組織について簡単に述べ、「所有」観の成立しにくい事情に補足的説明を加えたい。

タイヤル族の集落である「蕃社」(qalang) には、coto gaga (ひとつの掟、法、旧慣、規律、祭団) という組織があった。coto gaga は「同一部落ニ存ル宗族関係アル家ト家トラ以テ

組織」⁽²⁴⁾され、祭祀、狩猟、戦闘を共同で行い、時には人々に強い禁忌 (pusaneq) を求めるという機能を有した社会組織である。「蕃社」の公的な運営は、この coto gaga によって行われていた。coto gaga は、人々に強い規制を求める。伝統的な慣習 (gaga) を犯せば、それは家族や「蕃社」に不測の事態を惹き起す結果となる。それゆえ、祖先からの言い伝え (gaga) は絶対的な存在として、すべての人々が遵守しなければならない約束事 (gaga) であり、人々を強く規制するものであった。また、祭祀や狩猟、戦闘は決してひとりではできないのではなく、多くの人々の協力を必要としたであろう。このような集团的行動に際しても、それが「上等に」かつまた「きれいに」無事なにごともなく維持、運営していくためには、古来からの伝統的慣行 (gaga) は、厳守しなければならない。それは人々がおしなべて守らなければならない規律 (gaga) であり、社会的規範といえるものである。従って、タイヤル族の人々の行動は、常に集団のメンバーとしてのそれであり、gaga から逸脱した行為は存在し得ないのである。ここに社会的集団のひとつの単位としての「蕃社」が存在し、人々の社会的行為は常に「蕃社」という社会的集団のもつ gaga によって規制をうけるのである。換言するならば、タイヤル族の人々の行動は gaga にもとずいた集団行動といえるであろう。

これに対して、yanai 関係は、男性のほぼ同世代間の横の連帯組織である。それは、身体的にも、体力的にも狩猟の感覚に乏しい者でも、yanai であれば当然メンバーの一員としての処遇を受けた。メンバーであれば、精神的、物質的にも相互扶助の対象であり、ここに親和的団体としての機能をもつ。yanai 関係にあては、yanai として遵守しなければならないことや禁忌 (pusaneq) がメンバーに求められた。同世代同志の集団であるからして、それは coto gaga と比較すれば弱い規制であり、informal な規制であったと想像できる。仲間同志の内なる規制は、それゆえに強い規制となって yanai

の言動を規制する。

こうして、「蕃社」は coto gaga を縦糸に、yanai 関係を横糸に織まれていった。coto gaga は、「蕃社」のメンバーの集団共助の精神を、yanai 関係は同世代男性親属の相互扶助の精神を人々に伝えてきた。rawin という他者への呼びかけは、まさにその精神の表出であり、このような親和的呼称は彼らの社会的、経済的生活にも大きな影響を与えたであろうと考えられる。今日では、すでに coto gaga はその姿を消しつつあるが、現実の日常生活に根ざした yanai 関係だけは、依然として残存している。タイヤル族は、このような身近な生活と密着した文化的伝統である yanai 関係を保持しつつ、今日に到ったと考えられる。

日本領有時代、エヘン社の「蕃童」は「ガオガン教育所」の教育体系の中で、時間割に従って定刻通りの教育が行われたので、その結果、時刻を表現する「時間」(time) そのものは衆知化した。しかし、生活の実態から捉えるならば「実感を離脱」⁽²⁵⁾しているとは捉えがたく、山地特有の「山の時間」の存在を認めないわけにはいかない。更に「所有」の観念は、既述の事例からしても、いまだ伝統的な独自の「所有」観が残存していると結論的にいえるであろう。

今、エヘンは急速な都市化、物質文明化の波のなかで、伝統的な価値感と近代的あるいは漢民族的な価値感の錯綜がみうけられる。一大消費地である台北市をヒンターランドにもつエヘンは、自律的にしろ他律的にしろ台北経済圏に編入された。昭和 40 年代に電気が導入されて以来、恰も雨水が大地に吸い込まれるようにして物質文明が浸透してきた。昭和 50 年代には、かつての「理蕃道路」は年々改修、拡張が行われ、生活・産業・観光道路としての機能を有するようになると、価値感のカオスは更に顕著となった。道路の整備・拡張は山地経済を台北経済圏との絆を強める結果となる。それは、山地経済の発展は平地との接触なしでは成り立たず、平地人との接触は避けて通ることのできないこ

とを意味する。市場経済論理が持ち込まれ、自給自足的な社会から消費型社会へ移行すればする程、平地人との接触の機会が増大する。それは山地の人々に常に緊張感を惹起する。

ある山地人は、山産物の運搬を仕事のひとつとしている。運搬する山産物は、平地の「shobai」（仲買業者）の希望に従って「seiribilaq」（ていねいに整える）して、目的地へ、深夜トラックを走らせる。それは時によっては3時間以上も目的時間より早く到着する。荷積みから目的地まで、彼は常に腕時計を気にし、仲買人（平地人）に対する言動は、山地ではみせたことのないようないねいなものであった。

彼はまたある日、突然、平地で生活している19才の息子をつれ戻した。曰く「平地人のもとで働いているが、（生活状況をみていると）、muqan（平地人）にされている」と。

決してタイヤル族が民族のプライドを失ったのではなく、むしろ民族意識、民族的identityがあるからこそ、事例のような緊張感が表出してくるのではないかと考えられる。台北市に住むある平地人（男性）は、山地人を評している。「色が黒く目がするどい、粗野で怖い、米酒ばかり飲んでいて遊んで、学歴が低い、人のやりたがらない仕事をする、若い女性は華西街（歓楽街の地名：筆者註）」と。これに対して山地人の平地人評は「ずるい、ウソばかり」。「人殺しは外省人、泥棒は本省人。オーピリパイラン（弁髪・悪人）」（アミ族の評）⁽²⁶⁾である。

このような評価は、互いに相手を理解しようとしめない態度や価値感の違いからくるものであろうが、おしなべて山地人は懸命に働き、家族を守って生活しているのである。⁽²⁷⁾今ここで強調しておきたいのは、彼らが山地人としてのプライドを持てば持つ程、平地人との接触には強い精神的緊張感が伴ってくる。なぜならば山地人と平地人とは「心が違う」のである。娯楽施設の乏しい山地では、精神的苦痛、疲労をいやすため、それは飲酒行為となってあらわれる。⁽²⁸⁾飲酒行為はアル中患者をうみ、また更に飲

酒行為の底辺を若者へと拡大し、さまざまな逸脱行為、社会問題を生起する。⁽²⁹⁾

エヘンを取りまく社会的環境は、今まで述べてきたとおり、決して安心できるものではない。ある者は一家揃って平地へ移住し、ある者は祖先伝来の土地を平地人の求められるままに転売し、ある者は「保留地」の用益権を平地人に移譲し、ある者は自宅の別棟にビリヤード場を作り、日本製のゲームマシンを導入する。また、若者は平地の華やかさに吸い込まれるようにして下山してゆく。エヘンは、穏やかな風景のなかの一寒村にみえるが、その地下水の水脈は今まさに混沌とした状態にある。近代法的な「所有」観に、山地人の伝統的観念は押し流され、山林、更地、用益権を平地人に移譲する。そして最後にいうことは「平地人にダメされた」である。そんななかで、額に汗している青年は、「平地人へいき」という。誰れかれとなく訪ねてくる客に、その青年は食事と酒の持て成しをする。そこにエヘンの将来の姿を垣間見る思いがし、多少なりともそれは心の救いであった。

短い期間、被調査者の仕事を手伝いながらの聞き取り調査であった。そのため、更に精緻な調査を必要とする箇所、資料の導き方等に不適切があろう。読者諸賢の御指摘をお願いしたい。なお、執筆にあたり、瀬川孝吉先生、姫野翠先生から御教示等をいただいた。衷心より感謝の念を表したい。

註と参考文献

- 1) 「台湾高砂族系統所属の研究」 p. 22～25, 移川子之蔵編, 刀江書院, 昭和10年
- 2) 「番族慣習調査報告書 第一巻」 p. 13 臨時台湾舊慣調査会編, 大正4年
- 3) 同上 p. 13
- 4) エヘンから3人の現職警察官を輩出していることも、彼らの自慢のひとつである。戦前は、バロン山頂に砲台を築くために、山地人を労働力として利用し、角板山（大嵙崁前山蕃、現在の復興鄉澤仁村）から「理蕃道路」が開削された。大八車がやっと通れるだけの道幅であったが、それは「蕃外」との接触の機会を多くもたらした。大嵙崁溪の人々は、進取

- の気風が強く積極的で創造的姿勢を有しているのは、「理蕃道路」をたどって流入してきた物質文明の影響が大であったと思われる。ある山地人は、良質の果樹栽培のため日本から参考書を取り寄せ研究している。またある人は、日本の椎茸菌の自家培養を試みていた。
- 5) 『年令階級と焼畑耕作——アミ族タバロン社会の場合——』 p. 147 「現代諸民族の宗教と文化——社会人類学的研究——」 古野清人教授古稀記念論文集, 社会思想社, 昭和47年
 - 6) 同上 p. 147
 - 7) 「文化人類学2——民族とエスニシティ」 p. 5 アカデミア出版社, 1985年
 - 8) 同上 p. 14
 - 9) 『未開社会に於ける時の観念』 p. 776, 移川子之蔵, 「民族学研究第2巻第4号」 昭和11年の見解を参照
 - 10) 「ヌアー族——ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録——」 p. 162, 向井元子訳, 岩波書店, 1978年
 - 11) 註5) と同書 p. 141
 - 12) 註9) と同書 p. 788～789
 - 13) 「台湾省山地教育実況調査報告書」 p. 13～18, 中国教育学会, 中国教育学会台湾省分会共編, 民国43年
タイヤル族の「歳時禮俗」として「初開墾祭」, 「初播種祭」(「祭獵」「播種儀禮」を含む), 「除草祭」, 「初收穫祭」(「收穫儀禮」「祖靈祭」を含む), 「收藏祭」, 「開倉嘗新祭」, 「敵首祭」等の祭事が, 1953年当時, 行われていたことが報告されている。
 - 14) 「山村の文化地理学的研究」——日本における山村文化の生態と地域の構造——」 p. 81, 松山利夫, 古今書院, 1986年
かつて公にされてきた各種刊行物のタイヤル族に関する年中行事, 祭祀, 慣習, 禁忌, 親族関係・組織, 社会関係等は, 狩獵・採集民的性格を保有しているがゆえに, 創出されたのではないと思われる。つまりタイヤル族は生来, 狩獵・採集民であっていつの日か, 何んらかの理由によって焼畑耕作に基礎をおく民族になったと考えられる。今日の日常生活に残存している各種の慣行, 社会関係は, 狩獵・採集民としてのそれに収斂されるように思われる。
 - 15) 田上忠之によると「太陽の位置によって日出, 午前, 正午, 午後, 日没などに区別し」「一番鶏, 二番鶏と計算して四番鶏で夜が明ける」という。四番鶏はおそらく午前5時から6時位であつたろう。また雨で太陽の位置がわからぬ時は「チャッコフと云う小鳥の鳴声で時刻をはかり, 一番, 二番と数へて四番目に日暮となる」。「生蕃の話」 p. 23, 大正15年
 - 16) 「アタヤル語集」 p. 259, 台湾総督府, 昭和6年
 - 17) 「日本農村社会学原理」 p. 172, 鈴木栄太郎著作集I, 未来社, 1968年
 - 18) 同上 p. 173
 - 19) 「文化人類学事典」 p. 296, p. 371, 石川栄吉, 他編, 弘文堂, 昭和62年
 - 20) 「国語びき北蕃語辞典」 p. 153, 台湾総督府, 大正7年
 - 21) 註2) と同書 p. 236
 - 22) 同上 p. 237
 - 23) 昭和音楽短期大学姫野翠教授の御教示による。同様の例として, タイヤル族は山道にオートバイを駐輪しておく時, 枯れ尾花の葉をそのハンドル・バーに結んでおく。こうしておけば, すくなくとも山地人には盗まれないという。これもミャオ族と同様であるという。
 - 24) 註2) と同書 p. 320
 - 25) 註9) と同書 p. 802
 - 26) アミ族の平地人への評価は, 註23) 姫野翠教授の御教示による。
 - 27) 「社会文化変遷與高山族青少年問題——以環山泰雅族為例の初步研究——」 p. 285, 許木柱, 李亦園, 中央研究院民族学研究所專刊24, 民国67年。
1975年当時, タイヤル族(台中県和平郷環山)の年収が約40万元, 台湾の平均年収が約10万元であった。
 - 28) 「社会文化變遷中的台湾高山族青少年問題——五個村落的初步比較研究——」 p. 20, 李亦園, 中央研究院民族学研究所集刊48, 民国68年
タイヤル族の飲酒率は, 一人当りの年平均で, 米酒60.2本, ビール23.3本である。全国平均はそれぞれ12.3本, 15.5本であるから, かなり高い比率といえよう。
 - 29) 同上 p. 12, p. 16
タイヤル族の離婚率は1.76%(台湾地区の平均は0.41%), 犯罪率13.35人(アミ族4.49人, ブヌン族3.03人, パイワン族3.72人, ヤミ族1.42人。対1000人比率)